

目次

巻頭言	1
満州事変と東京裁判の石原莞爾 仲條拓躬	1
★淵上千津様への手紙 野村乙二朗	2
◆【連載】 蜃気楼の国・満洲国(その5) 坂本進一	4
●石原莞爾の「戦後」を歩く⑦ 岩崎章次	6
●昭和天皇の御製⑫ 総会報告	8
●会員便り 法要のお知らせ	8
●SNS	9
●コラム	10

宣言(昭和31年協和会「昭和革新論」より)

- 1、人類歴史は最終戦争時代に突入し、世界の統一は眼前に迫った。われらは最小の犠牲をもって、新しい歴史を開こう。
- 2、都市解体、農工一体、簡素生活、この三原則によって新日本を建設し、搾取と戦争のない、人類次代文化の先駆となろう。
- 3、東亜に対する過去の態度を深く懺悔し、まず近隣と道義によって固く結び、ひいて永久平和の実現に邁進しよう。

満州事変と東京裁判の石原莞爾



会長 仲條拓躬

昭和23年11月4日、東京裁判の判決が言い渡された。A級戦犯として起訴された28名のうち、7人が死刑判決を受け処刑された。その中の板垣征四郎と土肥原賢二の2名は、満州事変において中心的役割を果たした人物だった。しかし、満州事変を立案した人物、石原莞爾の名前はなかった。

石原莞爾は、満州事変当時、関東軍作戦主任参謀で、高級参謀であった板垣征四郎とは盟友だった。満洲合衆国を建国させるという思案も、そのための具体的な作戦計画を立案したのも石原莞爾であったのだから、石原莞爾の名前が戦犯名簿から外されているのは石原にとっても不思議なことだった。

前年の昭和22年5月2日、酒田商工会議所を臨時の法廷として、極東軍事裁判の公判が行われた。石原莞爾は「満州事変の中心は、すべて自分にある。自分を、戦犯として連行しないのは腑に落ちない。」と言った。

そして法廷で質問に立った検事や、取材に訪れた外国人記者などをやり込めた。今大戦最大の戦犯は、「無差別空襲によって非戦闘員を大量虐殺した、アメリカ大統領のトルーマンだ」という発言は、よく知られている。また、「日本の戦争責任を日清、日露戦争までさかのぼって調べる」と言われると、石原莞爾は次のように言う「それではペリーを呼んで来い、日本は徳川鎖国時代で、どの国とも付き合いたくないと言って、堅く外交通商の門戸を閉ざしていた。それをペリーが黒船でやってきて、門戸開放、通商交易を迫った。もし実行しなければ、大砲をぶっ放すと脅迫した。徳川政権は、結局米国の脅迫外交に屈して開国を決定し、列国と外交通商関係を結んだ。外国と付き合ってみる

と例外なく侵略主義の恐ろしい国だということを知らされた。それから貴国らが大先生として、日本は泥棒のような侵略主義を習い覚えたのだ。いわば貴国らの弟子である。もし日清、日露戦争が悪いというならばペリーを証人としてあの世から連れてくるのだな」と帝国主義の歴史をユーモアなど交えながら語り、米国への批判を行なったのだ。短い言葉ながら本質をよくとらえている。

なぜ極東軍事裁判が、酒田市において行なわれたかという点、石原莞爾を東京で訊問すれば、東京裁判と連合軍側の権威の失墜を招くことを恐れがあったからだ。酒田法廷に出廷する石原莞爾をリヤカーで曳いた側近である私の父が当時の状況をこう語っていた。歴史の本質的な部分を洞察していて興味深いところだ。

それに対して、「放火犯の消火作業」だとするテレビでの佐高信先生の批判があった。この批判については後日、ご本人と二人で食事をした際に、佐高先生の口から「ちよっときついこと言っちゃって悪かった。石原莞爾平和思想研究会の方々は怒っていなかったな」と言っていた。それでも、満州事変というものを放火して後で、日華事件拡大の消火に努めても、最初の罪が消えるわけではないという主張を繰り返した。

私の父・仲條立一は海軍中佐である祖父・仲條公治がいた広島県呉市から原爆投下後、爆心地へ入って被曝した。原爆が投下してから71年たった今年、米国のオバマ大統領が広島で被爆者と抱き合う姿を父が生きて目の当たりしていたらどう思ったことだろうか。

父は幼少の頃から石原莞爾の身の回りの世話をし、将軍をこよなく愛していた。将軍に血を分けたのも火葬したのは父である。父は最初まで石原莞爾の生涯を語っていた、死の間際、父の心に去来したものは若き頃の石原莞爾将軍をリヤカーに乗せて東京裁判へ曳く姿だったかもしれない。

コ◆ラム◆

▼似通った二つの言葉の違いを説明する時、先ずはその二つの共通点を示し、それから両方の違いを述べると理解しやすい。

例えば「習慣」と「慣習」であるが、その共通点は共に、①反復且つ継続される行為、②それが法律等で強制されていない、であろう。そして相違点は「習慣」はあくまで個人レベルの行為に留まるのに対し、「慣習」は広く社会全般で行われている行為だということだ。

具体例を挙げると、朝食前に近所を散歩するとか、モーニングコーヒーを飲むとかは「習慣」だ。それに対し、結婚で妻の姓が夫の姓になるのは明らかに「慣習」だ（戦後の民法では、夫婦どちらかの姓を選択できる）。

「事実」と「真実」も似てはいるが、異なっている。「事実」はあくまでも「真実」の一部でしかない。そして「真実」は複数の「事実」から複合的に構成されている。

大東亜戦争（太平洋戦争）を巡る評価のされ方は様々だ。①侵略戦争だった、②石油を全面禁輸された結果の「自衛戦争」である、③インドを含むアジア解放戦争と世界的に位置づけられる、というのが代表的なもののだろうが、いずれも一面の「事実」ではあるが、それだけで「あの戦争」の全体像とか「真実」を言い表しているとは思えない。

しかし、これらに共通して言えることは、対米戦争という選択をした当時の国策が大蹇跌であったという「真実」である。

その大蹇跌の結果、300万人以上の日本国民が戦死し、全千島列島をソ連に火事場泥棒され、広大な南方委任統治領、台湾や朝鮮半島、

日露戦争時の血で贖った南カラフト及び中国大陸での権益など、多くの領土と権益を失った。

さらに、独立国であるはずの本邦に在日米軍という外国軍の基地が半永久的に存在して国辱的な問題を生じさせている事実もその蹉跌の結果だ。

戦後生まれの世代には直接的な責任はないだろう。しかし「負の遺産」を何らかの形で是正するとか、今行われていることの子孫への責務はあるはずだ。

（山崎）

▼ボクシングの元世界ヘビー級チャンピオンのモハメド・アリ氏が74歳で亡くなりました。

ローマ五輪で金メダルを獲得後、帰郷したケンタッキーで人種差別を受け、悔しさから金メダルを川に投げ捨てたのは有名な話です。そこからアリ氏はマルコムXの影響を受け、イスラム教に改宗し「カシアス・クレイ」から「モハメド・アリ」に改名しました。

1960年にベトナム戦争への徴兵命令を拒否した（宗教の信条や政治的な背景に基づく）ことで有罪となり王座は剥奪、さらに国民からの「兵役を受け入れろ」という強い圧力に直面します。それでも信念を持ち戦い続けたアリ氏は、公民権運動の前進、そして戦争の支持率の低下へと市民を導いていきました。4年のブランクを乗り越えながらも1974年にはジョージ・フォアマンにKO勝ちし、王座に再び咲きます。私はまだ幼少期でしたが、この戦いはスポーツ史に残る感動的な試合でした。

1981年に引退してからはパーキンソン病を患い、長い闘病生活を送りました。1996年にはアトランタオリンピックの聖火を点火す

るなど、体の不自由な姿で公の場に登場しています。その後も社会に対してメッセージを発信し続け、2005年、米国ホワイトハウスで最高の勲章である大統領自由勲章を授与され、また同年、生涯をかけた米国での公民権運動が評価され、ドイツのオットー・ハーン平和賞を受賞しました。

2008年に黒人のオバマが大統領になったのは、アリが金メダルを投げ捨ててから約半世紀後のことです。オバマ大統領は、黒人差別の撤廃を訴えた公民権運動におけるアリ氏の貢献を称え、こう伝えていきます。「モハメド・アリは世界を揺るがした。彼の戦いは困難で、周囲から敵視されてきたが、彼はリングの外でも、人々の権利のために戦った」。

ボクシングを通し、戦争や差別に対して人生のすべてを賭けたアリ氏に、心から哀悼の意を表します。

（仲條江里子）

★発行所 石原莞爾平和思想研究会

〒179-0076 東京都練馬区土支田3-46-7

山崎行政書士事務所内

TEL(FAX兼用) 03-3925-2353(山崎)

郵便振替 00130-9-410942

発行人 仲條拓躬

編集人「永久平和」編集委員会

定価 200円（送料別）

会費(年間) 篤志会員 10000円以上

一般会員5000円、誌友会員4000円

第137号 平成28年(2016年)7月25日発行